教育原論（2020年前期）　第15回　解答（レポート）例

Ａ

私が授業の中で一番印象に残ったテーマは親子関係だ。アメリカと日本の親子関係の違いやその違いによる子どもへの影響など、とても興味深い内容であった。

　このテーマで私が特に印象に残ったのは、アダルトチルドレンと愛を受けて来なかった母親が自分を自分の子どもに重ね合わせて育てたことで子どもに大きな負担がかかっていたというものだ。未成熟なまま母親になったことで子どもの距離がうまく保てない母親や母親は子どもに愛を与えているつもりが子どもにとっては負担でしかなく、自分とは何かさえ分からなくなってしまう。

私のバイト先にも言動や行動からアダルトチルドレンが疑われる人がいる。私はこのテーマを学習してからバイト先でその人を見ると無性にその人の子どもが心配になってしまうようになった。その人の子どもはまだ、幼い。しかし、その人はバイトが終わった後、私たちとよくご飯を食べに行ったりしていた。私はもしかしたら子供たちはネグレクトに合っているのではないかと思うようになった。子どもは親を選べない。親は親になった以上、自分の事より子どものことを考えるべきなのではないかと考える。せめて、子どもがある程度自分で物事をこなせるようになるまでは一緒にいてあげるべきだと考えている。

　教師になったとき、生徒の中に親子関係で悩んでいて私達（教師）にSOSを出していたら、私はどのように相談に乗ってあげればよいのだろうかと疑問に思う。親子関係など家庭問題は他人が口を挟むような内容ではない。しかし、生徒が悩んでいる以上、力にならないという選択肢は無いと考えている。この疑問に対する今現在の私の考えは、教師だけで解決しようとせずにスクールカウンセラーと連携し、必要であれば児童相談所などの機関とも連携をとりながら、生徒の負担を増やすことがないようにするしかないと考えている。

Ｂ

私が、一番印象に残ったテーマは、学校についてというテーマである。今まで、教育について専門的な学習をしていなかったので、学校と家の違いは家ではできないことが出来るから、としか思っていなかった。

しかし、属性主義や業績主義などの家では味わうことのできない特質があり校内の友人や集団、組織、文化から自然に影響される面がことを知り、教員として子どもと触れ合うときに何気なく触れ合う時に出てしまうえこひいきや教室の規範をしっかり作らないと子どもの将来の社会で生活にも悪影響が出でしまうことがあるために日頃から気をつけなければいけないと思った。

また、子ども達は学校で授業をする時に教員が主導の授業で話を聞くのではなく、子ども達同士で対話をして考えを深めることなどを経験することは学校という大きな集団の中でしかできないことだと感じる。子ども達のささやきを聞き取ったり、グループワークを増やしたりして教員は、子ども達がより良い環境で学ぶことが出来るような授業や環境づくりをしなければいけないと思った。私は、子ども達の話をきちんと聞き、助け、どんな子どもに出会っても一生懸命向き合って子ども達の思い出に残るような教員になりたいと思う。

Ｃ

私が、教育原論の授業で、1番印象に残ったテーマは、教育思想についてです。今よりもずっと昔から、教育は大切なものだと考えられていて、たくさんの思想家が教育の仕方やつにあり方について考えてきたことが分かりました。その何百年も昔に考えられた思想が今の教育の形を作り、今でも影響を及ぼしているということがとても印象に残っています。

特に、ルソーの子どもたちには自分で成長発達しようとする能力が備わっているということと、デューイの学校は小さな共同社会だということが印象に残っています。

ルソーもデューイも子どもが中心となる教育を主張していて、子どもたちの感性や好奇心を大切にし、子どもたちの生活の中での経験を重視した思想だと言うことがわかった。

その他にも、教育原論の授業で、教育基本法についてや、アメリカと日本の教育方法の違い、教師の子どもたちへの影響力の大きさを知り、いじめや、差別について考え、知りました。

オンデマンドの授業で初めは不安なことがありましたが、自分のペースで資料を読み、考えることが出来ました。ありがとうございました。

Ｄ

授業の中で一番印象に残ったテーマは、「子ども理解の方法について」だ。理由は二つある。

一つ目の理由は、授業で取り上げた写真や絵から子どもの心理を知るという方法に興味が湧いたからだ。子どもたちの絵や写真を見ることで、子どもが見ている世界をそのまま観察できるという点が面白いと思った。また、嫌いなものを表す時に無意識に嫌な部分を強調して表現していることに気がつき、その点も面白いと思った。私はバナナの絵を描いたのだが、ただ単に「バナナの絵を描いてください」と言われた場合と、「嫌いなものの絵を描いてください」と言われてバナナを描いた場合で絵の描き方が変わっていることに気が付いた。普段バナナの絵を描くときにはきれいな黄色で全体の色を塗る。しかし、嫌いなものとしてバナナの絵を描くときには、完熟して黒くなってしまったバナナの黒い点をたくさん描いた。最初は絵や写真から人の心理が分かるのか半信半疑だったが、実際に自分で体験してみて絵や写真は人の心理を映し出してくれるのだと分かった。

二つ目の理由は、動画で視聴した藤原新也さんの授業が印象に残ったからだ。老いや死と真正面から向き合い、本来子どもたちから遠ざけられることが多い「死」はとても身近なものなのだということを指導する様子が強く印象に残った。

Ｅ

　私が印象に残った授業は、第11回、12回の「教師について」だ。小学校3年生の頃から今まで、教員になりたいという夢に向かって生きてきた。理想の教員像を掲げ、子どもたちと少しでも多くかかわりたいと思い、教師体験に参加したり、学習塾でアルバイトをしたりしている。しかし、この授業を受けて、私はまだ夢見がちであるということに気がついた。多くの先生の授業を受け、「私ならもっとこうしたのに」と思うこともあった。しかし、改めて考えてみれば、私が思うことは、恐らく経験値の高い免許を持った教員なら、当たり前に思うことである。現実では、思ってもできない何らかの要因があるのだということに授業を受けて気がついた。

　私の理想の教師像は、ひとりひとりと丁寧に向き合い、安心感のあるクラスを作ることができる教員である。しかし、教員は子どもの相手をすれば良いわけではない。授業準備や事務作業、親御さんへの対応、イベントの計画に運営、教室の管理と私には想像できないほど山ほどの業務があるのだろう。加えて、子ども同士の問題も絶えない。そして何より、時間がない。講義ノートには、ストレスの多い仕事で、バーンアウトする教員も少なくなく、ブラックな職業と言われ、教員志望者が減少している、とある。いくら公務員が安定しているからと言え、これではブラック企業と同じように見える。それでも教員を続けている人がたくさんいるのは、苦悩以上のやりがいや喜びがあるからだと私は思う。

　高校時代に、私が通っていた中学校の先生に、教員について話を聞きに行ったことがある。その時に、ひとりの先生が「お金が欲しいならこの仕事はやめたほうがいいよ」と言っていた。一方で、「子どもたちの笑顔ほど元気をもらえるものはない」とも言っていた。その時の幸せにあふれていた顔は今でも印象に残っている。その先生は、体育でなかなか採用されず、体育系の大学出身であるにもかかわらず、小学校で5年間教員をしながら、体育の採用試験に向けてあきらめずに取り組んでいたらしい。このように、教員がさらに教員を夢見て走り続ける、その情熱はきっと子どもたちへの想いから生まれているのだろうと、私は思う。人の成長に寄り添いながら自分も成長し続けられる、笑顔や感動であふれる毎日を過ごすことができる教員ほど幸せな仕事はないと、教員のブラック現実を知った後でも、私は断言したい。そして、理想の教員像は変わらず、過労死しない程度に、夢と理想に向かって、これからも走り続けたいと感じた。

Ｇ

　私は、「好きなこと、本、歌について考える」というテーマが一番印象に残っている。今後、生きていくうえで必要なものを学べたテーマや新しい発見ができたというテーマだったら他のものになるが、一番印象に残ったテーマとなると、「好きなこと、本、歌について考える」である。

　このテーマは、悩むことなくスラスラと書けたし、書いていてとても楽しかった。自分の好きなものを人に伝えるのはこんなにも楽しいことなのかと改めて実感した。どう表現すれば好きなものの素晴らしさを伝えられるか考える中で、また新たな素晴らしさを見つけることができたり、自分の好きなものに対しての熱意を再確認できたりしてとても有意義な時間を過ごせたと思う。

新型コロナウイルスによる影響で、自粛が求められ家にいる時間が長くなり、友達とも会えず課題に追われる日々を過ごしていたときに、息抜きという形で好きなものについて一方的に語ることでストレスが発散できた。息抜きも重要なことだと実感することができた。

Ｈ

　私が全部の授業の中で、一番印象に残ったのは、第5回の「子ども理解の方法について」がテーマだったときだ。子どもに写真を撮らせて、撮られた写真からその子を理解するなんて考えたこともなかったけど、都会の子どもと田舎の子どもでは全く違う過ごし方をしていて、物事に対する感情にも差が出てくることが読み取れて、とても興味深かった。

　藤原新也さんの授業では、嫌いなものを写真に撮るという課題があった。あえて嫌いなものを撮ることによって、その子が嫌いなものに対してどんな感情を持っているのか、実はそんなに嫌いではないのではないかなど、さまざまなことを読み取ることができておもしろかった。嫌いなものがあったら、見たくないし、考えることもしなくないだろうけど、自分の中に嫌いなものであるという認識があるだけで、あえてそれに目を向けてみたら、子どもたちは新たな発見をしたり、嫌いなものにも良いことがあるのではないかと考えたりしていて、とても感心した。好きなものを積極的に考えることは大切だし楽しいけど、嫌いなものも避け続けるだけではわからないおもしろい部分があるとわかった。

　私は、今まで興味が全くなかったアーティストを友達から熱心にすすめられて、外出自粛中にたくさん曲を聴いていたら、ファンになってしまったから、身の回りのことひとつひとつにもっと目を向けて考えてみようと思えた。そうすれば、外出自粛で一日中家の中で過ごしていても、いろんな発見があって、おもしろい一日が過ごせそうです。

Ｉ

私が授業の中で、一番印象に残ったテーマは、いじめについてである。「いじめ」の問題については今まで何度も学習してきたが、ここまで掘り下げて考えたのは初めてで衝撃を受けた。私自身が今まで生きてきた中でいじめを見たことがなかったし、漫画やテレビの中でしか起こらないようなことだと思っていた部分があった。教員を目指さなければ、いじめとは無縁の人生だったと思う。いじめの実態を知ったとき、疑問に思う部分が多かった。まずどうして自殺者が出てしまうほどいじめが放置されてしまうのかという疑問である。

いじめがすぐに解決できるほど簡単な問題でないことはわかっているが、いじめを受けて助けを求めている児童を助けることは教員であれば、だれでもできるのではないかと思う。私がこのいじめについて学んで、教員になって絶対に実現させたい目標が二つできた。　一つは、子どものいじめを絶対に見逃さない教員になることである。どのような状況にあってもいじめられている子を守り続けることができるような教員になりたいと強く思う。実際に教育の立場に立てば、学校という大きな組織の下で働くため自分の思った通りに行動できないこともあるかもしれない。ただ、自分が教員となったとき、いじめから決して目をそらさずしっかりと向き合っていくという信念は持ち続けていきたいと思う。

二つ目は、だれにとっても居心地の良いクラスを作ることである。これは教員誰しも目指しており、とても難しい目標であると思う。ただ、教室に、学校に行くのが子どもにとって楽しい、そう思われるようなクラスを作りたいと考えている。

私が目標として挙げたこの二つの他にも教育原論の授業を受けて様々な目標やなりたい自分の姿が見えてきた。これから学んでいく中でもいろいろなことを吸収していこうと思うが、前期の授業を通して学んだことは自分が行き詰ったとき、初心にかえったときに思い出すことができるようしっかりと残し、教訓としていこうと思う。

Ｊ

教育原論の授業は、毎時間興味深い資料や解説が多く、一番印象に残ったテーマというのを選ぶのは難しかったです。それでも、あえて一つテーマを選ぶとするなら、第8・9回目の「いじめ」に関する授業です。教員とは何か、指導方法はどうするかなど、他にも重要なテーマはありましたが、一番インパクトが強かったのはこのテーマです。

　卑劣で残酷なこのいじめという問題は、防ぐことが難しいです。だからと言って、いじめが起きてからでは遅いとも思います。いじめは社会や大人の世界にも無いわけではありません。ですが、いじめ＝児童や生徒間で、学校という場所でという印象がとても強いです。なぜか教育現場に多い印象。それはどうしてなのかと考えたことがあります。昨年、神戸市の小学校で起こった教諭4人による同僚のいじめもありました。どうして学校でいじめは起きるのか、無くならないのかと疑問を抱いている中で、この講義に取り組みました。

　また、第8・9回の課題で書いたこと以外の感想としては、いじめの形そのものが昔と比べて変化していると思いました。森田洋司さんの｢いじめの4段構造論｣というものは、現在でもあると思います。いじめには、被害者と加害者がいる。また、そのいじめに関わっておらずただ見ているだけの観衆や傍観者がいる。この4段構造で明らかに不利な状況、可哀想な立場にいるのは、被害者ただ1人です。被害者1人対その他の全員という関係が、ただ見ているだけの人からすると無意識で故意ではないと言っても、そうなってしまっていると思います。この構造が今は、TwitterやLINEなどのSNS上に形が変わり、いじめそのものを可視化できないようになってしまっている気がします。確認することができなければ、注意することも守ってあげることもできません。実際、私がアルバイトをしている塾の塾長先生に教員として働いていた友人がいたそうですが、担任をしていたクラスにSNS上でいじめを受けていた生徒がおり、その生徒は亡くなってしまったそうです。教員として働いていた友人も精神的に病んでしまい、教員を辞めてしまったそうです。このような最悪事態も、教員を目指しているということは無関係なことでは無いということです。

いじめというものは無くならないのかもしれない。だからこそ、私たちは向き合い続けなければならないと思います。これからも自分自身で学び続け、知識や考えを深めていきたいと思います。

Ｋ

私が、授業の中で、1番印象に残ったテーマは、「差別と教育」です。実際の映像を見て、かなりのインパクトがあり、とても印象的です。

授業内の動画では、人種差別に触れられていて、瞳の色、皮膚の色、育った環境などの違いだけで人を差別してはならないということが児童たちに伝えられていたと思います。人種差別は日本の学校でも起こり得ることであるし、もしかしたらもう起こっていることもあるかもしれません。人種差別では無くても、福島の原発の時には現地から逃れてきた児童を転校先のクラスの児童がいじめてしまったといった事件もありました。集団と少しの違いがあるだけで差別されるといったことは絶対にあってはならない事で、無くす為にもしっかり伝えられるようになりたいと思いました。

また、教師になったら、児童全員が等しく教育を受ける為の環境づくりが必要とされますが、公平・平等にする為の配慮も「差別」に捉えられてしまうのではないかと私は思うのです。例えば、発達障害を抱えている子を優先して授業を進める、もしくはその子を気にせずにどんどん授業を進めていってしまう、というようなことです。このような場面でも、誰も不安や心配を抱えることなく、「差別」されている、しているを感じることなくクラス運営、授業展開をしていけるよう、今までの教育原論での学習から、これからの大学生活でしっかりと技術・力を身につけていけるようにしたいです。

Ｌ

授業の中で一番印象に残ったテーマは差別と教育についてだ。このテーマの授業では相手を思いやることが大切だということを実際の体験を通して子供たちに教えるビデオを見た。

この時の感想でも記述したが、私はこの方法が差別についての理解を深める上で最も効果的であり、この方法を広めたいと言った。ですがこれを子供に体験させる際には細心の注意が必要であり、子ども達の心の傷を思うと、よほど教師に力量がないと、このような授業はできないと武内先生が仰っていた。本当にその通りだと思い、だからこそ日本で学校でこの授業をしているのは聞いたことがなく、私自身も小学生の頃に経験しなかったのかと非常に納得がいく返しでとても感心させられた。

私自身がこういったことをできるような力量になれるかは定かではないが、気持ちとしては差別を無くすことを教える努力を全力ですると共に、本当の意味での差別というものを教えてあげたいと思っている。もし仮に上手く伝えることが出来なくても、自分がそんな理不尽なことで差別されることは気持ちいいものでは無いので、他人には理不尽に差別をしないようにし、もし本当に批判をしたいのならば、しっかりと論理的に批判してあげることが相手にとっても自分にとっても大切だと思いました。